
少年と神様

雪人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と神様

【Nコード】

N0381S

【作者名】

雪人

【あらすじ】

とある部屋に呼び出された少年。そこに現れた神様との、ほんの少しのおしゃべり。

「……あれ？」

気がつくと、僕は真つ白な部屋にいた。

全く記憶にない部屋で、なぜここにいるかも分からない。

自分が直前までどこでなにをしていたのかすら思い出せない。

「ええと……どうしよう？」

なぜだか恐怖は全く感じないが、戸惑いは出てしまう。せめて、なにをどうしたら良いのかを教えてほしいところだ。

辺りを見回すが、ドアも無ければ家具もない。ただの白い部屋である。

当然、他の人もいるはずが……

「やあ。」

いた。随分と気の抜けた挨拶をしてきた中年男が、いつのまにか目の前にいた。

「え、あ、どうも」

とりあえずこちらからも挨拶しておく。

「ふむ……意外と落ち着いているな」

「そうですか？自分でもよくわかんないです。なんかこの部屋落ち着くんですよ」

「はあ……そんなものか……」

「ええ、そんなもんです」

「ところで君、私は何者か気にならないのかい？」

「ああ……まあ多少は」

「おいおい、こんな状況だぞ、もっとパニックしたらどうだ？」

このおっさんは僕に何を望んでいるのだろうか。

「パニックって…とりあえず、あなた誰なんですか？」

「なんか投げやりだなあ…まあいい。私はあれだ、お前達が神とか言ってる存在だ」

「あ…神様ですか」

「…随分薄いリアクションだな。じゃあれならどうだ？私が君をここへ連れてきたのだ！」

「あ、そうなんですか。じゃあ帰してください」

「うわあ、なにそれ傷つく、こっちの用件少しは聞いてけよ」

「なんかめんどくさいおっさんだなあ、こんなのが神様なのかあ…」

「おい、今めんどくさがっただろう」

「え、分かったんですか？さすが神様ですね」

「いや、もう顔でね、すぐに分かっちゃったよ」

「あ、そうですか、そりやすいません。ところで用件ってなんですか？」

「適当すぎない？神様だよ、一応」

「いいから教えてくださいよ」

「もう…まあいいか」

早く教えてくれないだろうか？多分、こっちだつて暇じゃないのだ。神様だからって、人の時間は奪っちゃいけないだろう。

「まあ、あれだ、私ってね、創造神なの。分かる？」

「ええと…色々つくってるんですよね？」

「そうそう。それでね、君も作ってるわけよ」

「はあ…ありがとうございます」

「いや、別に礼はいいいよ、そういうもんだから。それでね、ちょっと伝えなきゃいけないことがあるわけなんだよ」

「なんですか？」

「なんていうか、直球で言うとな、君、失敗作なの」

「へ？」

失敗作？僕が？

「そう、平たく言うと、君は馬鹿なんだ」

…なんか納得だ。僕は頭が悪いし、運動も出来るほうじゃない。おまけに空気を読むということもいまいち出来ない。両親や友達もよくそのことを注意してくる。

「そうですか、わざわざ教えてくれてありがとうございます」

「…いやいや、もっとショック受けない、普通？自分が失敗作なんて言われてるんだよ？しかも神様からだよ？創造神だよ？」

「ええー…だって自分に取り柄がないのは知ってますし、今更ですよ」

「えーまじでー？なんだよ、緊張してた私が馬鹿みたいじゃん」

「緊張してたんですか？」

「してたよ。そりや顔には出さないようにしてたけどさあ」

「別に気にしてくれなくてもよかったんですよ」

「いや、だってそういう訳にはいかないじゃん？一応、責任は私だし」

「はあ…大変ですね」

神様にも色々あるみたいだ。

「でも、僕がもし、ショックを受けてたらどうするつもりだったんですか？」

「え？ああ、それはだねえ。何か君が望む才能を一つ、あげるつもりだったんだよ」

「才能、ですか…？」

「そう、才能。なんなら、今からでもあげるよ？」

「今からですか…？」

「ああ、そうだ。ショックはなかったとしても、今まで不自由もしてきただろう。どんな才能でもあげるよ」

才能。それさえあれば、僕はもっと周りに迷惑をかけないのだろうか？何か勉強や運動が出来れば、両親は喜ぶだろう。空気をしっかりと読めれば、友達はずっと笑ってくれるだろうか？

「なんでもいいから、言ってみらん？一つ、あげるから」

「……」

「どうだい、思いついたかい？」

「ええと……」

「ほれ、言ってみな？」

「……やっぱいらないです」

「……本当に？」

「はい。」

「才能さえあれば、君はすごい人間になれるかもしれないよ？失敗作なんかじゃなくなるよ？」

「でも、今のままでも、十分皆が笑顔ですから。僕はそれで満足です」

「笑顔？」

「はい。僕が走るのが遅くても、両親はがんばったね、って笑ってくれるし、友達はいつも、あきれたように笑ってくれます。だから僕は、これ以上なんていりません」

「はあ……そんなもんか……」

「ええ、そんなもんです」

「そうか」

「そうです」

「なら、いいや、君を元の場所に帰してあげるよ」

「ありがとうございます」

少年が帰った後の白い部屋、神様は一人、まだ残っていました。

「…なんだかんだで、私、失敗してなくね？」

そう一人呟き、神様はその部屋から出て行きました。

（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

今回は、ちょっと思いついた光景を膨らませてみました。
感想、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0381s/>

少年と神様

2011年10月7日21時54分発行